四　その他

日本精神史講座（昭和二十一年三月廢止）

本講座は昭和十三年四月から開講された。そのころ一般に日本についての研究が高まり、國體明徴・日本精神の探究などが盛んに唱えられていた。このとき文部省はとくに東京・京都の兩帝國大學文學部に日本思想史・日本精神史に關する講座を、それぞれ一講座增設することとし、國史學第一講座擔任の西田直二郎教授がこれを兼擔し、哲學科からは高山岩男講師が助教授となつて講義が始められた。

この講座を史學科に屬せしめるか、あるいは哲學科の一講座とすべきかについてはかなり議論のあつたところであるが、設置の趣旨としては哲學・史學・文學の諸方面から攻究さるべきものであるとし、ここに二學科共通の學科として、新たな例を開いて設置されたのであつた。そこで文學部規程においては、哲學科・史學科・文學科のいずれにも正科目として置かれ、學生はその專攻學科のいずれたるとを問わず履修すべきもの、すなわち文學部全學生の必修の科目として決定されたのである。このように日本精神史は文學部の正科目ではあつたが、學生はこれを專攻の科目として選ぶことはできず、從つて日本精神史專攻學生および卒業生を出すことはなかつた。そして講義も毎年普通講義のみを行ない、哲・史・文各學科學生に聽講させたが、特殊講義・演習は行われなかつたので、この點他の專攻學科となるべき諸講座とは異なつていた。

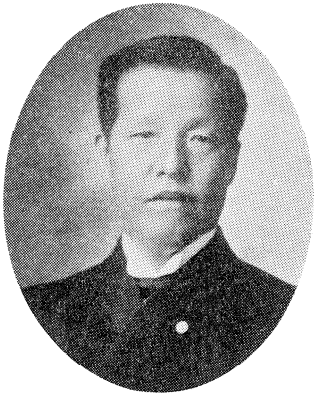
講義は昭和十三年以來二十年度まで、西田教授が「日本精神史概說」を講じ、また高山助教授は「近世に於ける

古代の理念」（昭一三）、「中世佛教の成立とその根本思想」（昭一四）、「日本精神と外來思想」（昭一五）、「日本政治思想」（昭一六）、「中世思想史」（昭一七・前後）、「武士道論」（昭一八）、「八紘爲宇と所の論理」（昭一九）、「日本精神史の諸問題」（昭二〇）などを講じた。

終戰後、この講座は戰時中の增設であり、その名稱にも考えるべき點があるとして、講座名の改稱や內容を改めることについて議論があつたが、京都大學でも講座數の縮小が行われるや、文學部ではこの講座が削減されることとなり、昭和二十一年度からその姿を消すに至つた。

教育學教授法講座（昭和二十八年十月教育學部移管）

本講座は明治三十九年の文科大學の創立と同時に設けられた講座の一つで、その創立委員であつた谷本富が、創設とともに教授となつて本講座を擔任した。



谷本教授

谷本教授は、明治二十年代にヘルバルト派の教育說の紹介祖述に多大の努力を捧げ、『科學的教育學講義』および『實用教育學及教授法』はその成果であつた。ついで明治二十七、八年の日清戰爭後、國民的自覺が高まるに及んでは、ウイルマンなどの學說を基本として、社會的國家的教育を唱導した。『將來の教育學』などはこの時期の代表作である。教授は明治三十二年から三十五年まで歐米に留學、歸朝後『新教育講義』を公刊した。その新教育とは、從來の劃一的教育を打破し、生徒の自然に從つての個別的教育を主張し、かつ道德教育・宗教教育を强調したも

のであつたが、これにはエレン・ケイの説の影響が多かつた。三十九年本學教授に任ぜられてのちは、この新教育觀を基礎として學説を展開し、學生を薫陶するとともに、實際教育を指導することも怠らなかつた。講座の名稱が他の諸大學のそれと違つて、とくに「教育學教授法」と稱したことも、教授が理論と實地を併せ重んじた方針の現われである。谷本教授は、大正二年八月いわゆる京大事件に坐して退官するまで在任九か年、その間のおもな研究の成果は『大學講義全集』(大四・五)として出版され、また大學の普通講義を増補して大正十一年に出版されたものに『教育學大全』がある。

谷本教授の後をうけて本講座を擔任した小西重直教授は、明治三十五年から三十八年まで歐米に留學し、歸國後四十一年には『學校教育』を、四十四年には『現今教育の研究』を發表し、その穩健中正な學説と、圓滿溫厚な人格をもつて學界に認められていた。大正二年本學教授に任ぜられてから、昭和八年本學總長に任ぜられるまでの十九年間、教授はその長い年月を孜孜として研究を進めるとともに、學生の指導に寧日がなかつた。

小西教授は、大正十三年までは「教育學概論」の題目で、それ以後昭和七年までは「教育思想概説」の題目で普通講義を行ない、特殊講義としては、大正五年から十一年までは西洋教育史を主とし、中學教育發達史・兒童教育史・米國教育史などをも講じ、大正十二年以後は近代および現代の教育思想を講義し、演習にはルソー、フレーベル、ヘルバルト、ローゼンベルク、ナトルプ、デューイなどを取り扱つている。教授はルソー、ペスタロッチー、シュライエルマッヘル、ナトルプなどの西洋教育學者のみならず、廣瀬淡窓、上杉鷹山、細井平洲などの日本教育思想家からも多くを攝取して、獨自の教育哲學に到達したが、中でももつとも深く傾倒したのはペスタロッチーであり、後年では廣瀬淡窓であつた。淡窓の八十年祭に際し、教授は淡窓の生地日田市で「人間性の本質と教育」と題して記念講演を試みている。その教育哲學によれば、教育の窮極的根柢は「天地の親心」であつて、それにつながる「絶對的な至誠眞實」は、具體的に現われるとき敬愛信となる。このような教育哲學に立つて、ことに勞作教

育を重要視する教育學を展開しようとしたのが、小西教育學であり、その業績としては『小西博士全集』五卷（昭一〇）があり、その主著は『學校教育』、『教育の本質觀』、『勞作教育』、『廣瀬淡窓』などである。

これよりさき、法科大學の織田萬教授が教育行政および教育行政法の授業を擔當し、本講座開設の當初から副科目として隔年にその講義が開かれた。その後法學部の佐々木惣一教授、さらに同じく渡邊宗太郎教授がこれを承け繼ぎ、終戰直前に及んでいる。なおとくに織田教授には『教育行政及行政法』（大五）の著がある。

また小西教授の日本教育史研究は高橋俊乘講師によつて紹述された。高橋講師は昭和三年から隔年に講師として日本教育史を特殊講義において講じ、昭和十年から二か年の在外研究を終えて後も、毎年その講義を續けた。『增訂日本教育史』（昭四）、『日本教育文化史』（昭八）はその研究を組織的にまとめたものであるが、さらにその後『近世學校教育の源流』（昭一八）、『世阿彌元清』（昭一八）を世に送り、戰後も「教育の主體と客體」（昭二一）などを講じたが、昭和二十三年逝去した。

木村教授

昭和八年小西教授が總長に就任するとともに、心理學講座の野上俊夫教授が本講座を分擔した。野上教授は、大正十年小西教授外遊中も、藤井健治郎教授とともに本講座を分擔したが、昭和十四年分擔が解かれるまで、ホールの「青年期」、モンローの「西洋教育史概要」の演習を擔當した。普通講義は篠原助市講師が昭和八年度を擔當し、翌年から十二年度までは長田新講師が行ない、特殊講義は、昭和八年に廣島文理科大學から本學に轉じた木村素衞助教授が擔當した。木村助教授は、十三年度から普通講義「教育學序說」を擔當、十五年三月には教授に進み、本講座を擔任することとなつた。木村教授はドイツ觀念論と西田哲學の研究を背景とし、表現的生命の構造を究明、自覺的表現的存在としての人間の具體的把握から教育哲學の建設に努め、

『フイヒテ』(昭一二)、『國民と教養』(昭一四)、『獨逸觀念論の研究』(昭一五)のようなドイツ觀念論研究、および『表現愛』(昭一四)、『美のかたち』(昭二二)などの表現的生命の考察の著書を世に送り、十七年には滿洲および中國に出張、二十年には學生部長に補せられたが、二十一年二月長野縣上田市に出張中病をえて急逝した。同年大著『國家における文化と教育』が出版されたが、これは教授が多年特殊講義で取り扱つた諸問題研究の集大成とも見られるものである。

木村教授急逝後、二十一年からは普通講義および演習を新たに下程勇吉講師が、研究を高橋講師が擔當したが、下程講師は二十二年六月京都府立醫科大學から本學に轉じて助教授となり、ついで翌年八月教授に進み、本講座の擔任となつた。その後下程教授は二十五年五月、發足する教育學部の整備委員となり、六月には教育學部教授を兼任し、十月米國の教育事情視察のため渡米した。ついで翌年一月歸朝後四月本學教育學部長に就任するとともに本學部教授をも兼任、二十八年十月本講座の教育學部移管を機會に兼任が解かれるまで本講座の授業および學生の指導に當つた。下程教授は現象學的哲學の研究から出發し、二宮尊德の研究に力を致し、終戰前までに『フッセル』(昭一一)、『天道と人道』(昭一七)、『二宮尊德』(昭一七)、『存在と意味』(昭二一)、その他の著述を公にしていたが、終戰後本學に轉ずるや、かねてからの人間學的研究を背景とし、教育の人間學的基礎を明らかにする教育哲學の樹立に努力し、演習はマックス・シェラー、デューイ、カントなどを取りあげている。またつぎに述べる教育指導者講習の運營、教育學部の發足、關西教育學會の育成、近畿實驗學校の指導などに忙殺される間、時務の要請に應える批判的見地に立つて世に送つた『生活教育の根本問題』(昭二五)、『二宮尊德の生活と思想』(昭二五)、『日本の目立教育』(昭二六)、『吉田松陰』(昭二八)、『近代學習原論』(昭二九)、『社會的知性の教育』(昭三〇)などがある。

終戰後いわゆる新教育の興隆とともに、教育方法の心理學的社會學的方法や、教育課程の研究の必要が痛感され

るに至つた。本講座においても、二十五年三月第二講座の主任教授として正式に招聘することに決定した東北大學正木正教授の集中講義をはじめ、和田陽平、大西憲明、末永俊郎、芋坂良二の各講師が教育心理學を、黒丸正四郎講師が精神衛生學を、永井道雄、渡邊洋二兩講師が教育社會學を、廣岡亮藏、鰺坂二夫兩講師が教育課程をそれぞれ講したのであつた。

終戰後の教育界の混亂は實に言語に絶するものがあり、本學も多くの事業、ことに「教育指導者講習」Institute for Educational Leadership（略稱 IFEL）の管理および運營に當るに至つた。本學本部事務局職員をはじめ、本講座關係者がこの講習の運營のために拂つた勞は多大であるが、大學と地方の教育指導者との結びつきができたことは注目すべきである。米國側からは各回ともに大學教授その他の專門家が參加し、國內の他の諸大學の教官も相當數協力したが、本學においても本學部および各學部の多數が參加したことは、とかく直譯的な行き方に制御を與え、講習を充實したものにしたといえよう。昭和二十四年から二十六年度にわたる前後三回の講習において、

教育長グループ	一九九名
小學校指導主事グループ	一四五名
中學校指導主事グループ	一六一名
中等學校管理グループ	六九名
教授グループ	一六名

を主たるものとし、そのほかつぎの講習にも本講座の關係者は多かれ少なかれ關與した。

一般教育グループ	二一〇名
青少年指導者グループ	一五五名
大學行政官グループ	四四六名

創設の明治四十二年から昭和二十九年に至るいわゆる舊制卒業生二一〇名の卒業論文の傾向についてみると、その種類は極めて多面的であるが、それを原理的なものと方法的なものに大別し比較すると、つぎのような傾向が窺われる。

時期	原理的なもの	方法的なもの
第一期（明治四二―昭和　八）	七一％	二九％
第二期（昭和　九―昭和二〇）	八五％	一四％
第三期（昭和二一―昭和二九）	四七％	五三％

これら二一〇名の卒業生中、最近の調査による死亡者五二名・消息不明者二八名を除いた一三〇名について、試みにこれを職業別に見ると

大學關係教官	七三名	高校・中學・小學校教官	一五名	研究所關係	六名
教育行政關係	六名	宗教關係	五名	官　吏	四名
圖書館關係	二名	政治關係	一名	ジャーナリスト	一名
病院關係	一名	會社員	一名	自宅（職業別不明）	一五名

となり、大學關係教官が壓倒的多數を占めているが、いずれもそれぞれの分野で活躍しており、今後の發展が期待される。

かくて昭和二十五年教育學部の發足とともに、半世紀の歴史をもつ本講座は、同學部の第一講座として移管されることに決定し、その移管が二十八年八月に完了し、また舊制學生が業を卒えた二十九年三月とともに、教育學關係の講義はすべて文學部の講義題目から姿を消すに至つた。一講座から一學部への發展をみた今日、幾多の感慨を禁じえぬものがある。